■ 研究十二月往来〈49〉 ■

一休宗純の詩と能

田口和夫

一休宗純と能とのかかわりは吉田東伍博士が『禅竹集』に「一休題頌」として能に関係する九首をおさめて以来、金春禅竹との交渉という面で言及されることがおおかったようであるが、『金春古伝書集成』解説で「両者の関係が明らかになるのは、応仁元年九月、一休が乱を避けて薪の酬恩庵に入り、その頃禅竹もまた薪の多福庵に住して以後のこと」と指摘されて以来、それについても再検討が必要となっているようである。ただ、一休詩の中に「金春大夫」（七郎元氏・宗筠）あるいは「金春八郎」（元安・禅鳳）としるすものがあるところからすれば、金春三代と一休のかかわりはふかいとみられ、一休の観能はおおむね金春家所演のものであったろうことは想像にかたくないのである。[注1]

私は一休の『自戒集』[注2]にみえる次の詩によって〈自然居士〉の古形を想定してみた。[注3]

舞台ノ自然居士ノ船　居士ノ風顛頗ル似レリ禅ニ
八景ノ歌罷ミテ打ツ二腰鼓ヲ一　小鼓許不レ直ニ多銭一

『自戒集』は酬恩庵蔵の一本しかなく、その成立は「応仁元年以前」であることが中本氏によって推測されている。応仁元年（一四六七）といえば禅竹最晩年であり、その子宗筠の大夫期である。シテの年齢的にみて、これはおそらく宗筠の演能をみての作と推定される。この時期にさかのぼる〈自然居士〉台本は現存せず、永正初（一五〇四から）とされる禅鳳自筆本が最古本となっている。一方この能は観阿弥作として有名であり、義満の面前での観阿弥演能以来、永享四年（一四三二）の矢田演能、寛正五年（一四六四）の糺河原勧進猿楽第二日などに記録がみえる人気曲だったが、その流動変遷の実態についてはかならずしも明確になってはいなかった。これは他の能についても同様だが、世阿弥の論にみられるものと、現在につながる台本との間にある空白の期間は、案外にながいのである。そういう眼で『自戒集』のこの記述をみると、現在の演出とはちがう部分がみられ、それは〈自然居士〉のうしなわれた古型のひとつとかんがえられるのである。それは第三句「八景の歌罷みて腰鼓を打つ」である。くわしくは小論にゆずるが、羯鼓の段（これも昔はささらと足拍子で演じたか）の前に近江八景をうたう部分があったこと、これはおそらく「船の曲舞」がおこなわれるより前、その位置に、ささらによってはやしまう部分として存在していたのであろうと推察されるのである。あるいは奈良での演能、より原型的な面白さを要求する観客層といったことのために、古形が再登場したのだともかんがえられるが、年代的に禅竹所演の面影をもこれがつたえうるときであることをかんがえあわせれば、世阿弥以前の姿と連続しているという推察も不可能ではなかろう。

中本氏は偈頌の集である『狂雲集』とちがって『狂雲詩集』では能そのものがその詞句をふまえて詠ぜられているということを例をあげてとかれ、能を題材とするものが『狂雲集』に二首、『狂雲詩集』に十五首あるとされる。これは『禅竹集』（『金春十七部集』も）所載のものに明白に能と判明するものをあわせられたものであろう。[注4]今、これを所出の順に、その題名を番号とともにあげてみよう。

『狂雲集』423題二江口美人匂欄曲一、472金春座者歌。『狂雲詩集』216金原（ママ）大夫市原小町之能、231 232 233題二松風村雨二三首一、235錦木、236芦刈舟、238相坂蟬丸藁屋、239 240山伏峯入谷講猿楽二首、

241 242題三市原小町二首、244志津賀、264 265題三松風村雨二首、266金春八郎羯鼓。以上となる。

番号によれば判明するように『狂雲詩集』は、ある程度類聚してあるといえよう。連続するものの中にある234紹固酔歌、237尺八、243純老睦室親子約、245愛寿などが問題となる。後述するが、これらは皆、能に関係をもつといってよいものである。『自戒集』では前引のほかに「猿楽歌高笙熊船」ではじまる一首があるが、＜自然居士＞についての第四句同様、養叟宗頤についての非難とみられ、具体的にこの曲とはいえないようである。

これほどの数が能を素材とし、しかも能の詞句・表現によく取材して構成されているとすれば、能楽史の空白部分をこれによってすこしでもうめることが可能になる筈なのである。＜自然居士＞についての小稿はその一例といってよいであろう。詩の検討によって、いくつかの問題点をひきだすことができるがはじめに234 237 243 245についてふれておこう。

234紹固の酔歌　竜田錦を織る蜀江流る　旅客心無うして渡頭に吟ず　乾坤万里謳和上　愛し聴く天然童女の謳（中本氏による）

「紹固」は253紹固喝食春遊、254紹固喝食頌などによれば一休の愛した喝食であったが、222 223癖紹固二首によれば「奈良春日下松の詞」（222）、「歌舞袖飄って紅色綺なり」（223）と能の歌舞に熟達していたようである。その宴遊の時の歌か、内容は第一句「竜田」とある所から能＜竜田＞が想定される。これは禅竹作（『金春古伝書集成』62ペ）とされる曲だが、そのワキ旅僧（旅客）が前シテ巫女に「心もなくて此立田川をわたり給はば」（無心）、とせまられて「竜田川紅葉みだれて流るめり、わたらばにしき中や絶えなん」（竜田織錦蜀江流）とうたう（吟渡頭）、後シテ竜田姫の神霊（天然童女）がうたうクセの中に「山もどうぜず、海辺も浪しづかにて」（乾坤万里謳和上）とみえる。これだけの対応からみて紹固は＜竜田＞をうたった（あるいは演じたか）とみられよう。

237尺八は田楽能あるいはそれをうけた猿楽能＜尺八＞、243純老睦室親子約は＜烏頭＞に関連、245愛寿は廃曲＜愛寿（愛寿忠信）＞とみてよいとおもわれるが、これは次回に論ずることとしたい。

注1　計十首。一首は南江宗沅のもの。

注2　中本環氏校註『狂雲集・狂雲詩集・自戒集』現代思潮社　昭51　以下引用同書

注3　小稿「作品研究自然居士」『観世』昭56・11掲載予定。

注4　中本氏は詩名はあげていられない。

（たぐちかずお　能楽研究所員・静岡英和女学院短大教授）